

長野県における盆花採りの衰退と野の花の生育地の消失

浦山佳恵¹・須賀 丈¹・畑中健一郎¹・連 美綺^{1,2}

近代における長野県の盆行事は先祖の霊と親しく交流する機会であった。人々は山野でキキョウやオミナエシ等の盆花を採取する盆花採りによって先祖の霊が迎えられと信じていた。盆花は先祖の霊の依り代と信じられ、先祖の霊を祭るために盆棚に飾られたり、先祖の霊を送るために川に流されたりするなど、盆花は盆行事において重要な役割を果たしていた。しかし近年、野の花の生育地は減少し、キキョウは絶滅の危機に瀕している。

本研究では、1955～1965年の盆行事及びその変化に関して盆花利用に焦点を当てた聞き取り調査と当時の盆棚の再現を長野県の7地域で行った。さらに牛馬数、草地面積、薪炭生産量、圃場整備面積、専業別農家数、ニホンジカによる農林業被害額について統計情報を調査した。

その結果、長野県では1960～1975年にほとんどの地域で盆花採りが行われなくなっていたことが明らかになり、その理由として、全地域で野の花の生育地がなくなったことがあげられた。かつての盆花の主な調達先は採草地、薪炭林、田畑の畦・土手だったが、1955年以降のエネルギー革命に伴う役畜の減少による採草地の減少、薪炭利用の減少による薪炭林の放置、圃場整備による農地の畦や土手の大規模土地改変及び草刈りの機械化が同時に進み、野の花の生育地が変化・消失することで盆花採りが衰退したと推察された。

キーワード：盆行事、キキョウ、草地、盆棚

1 はじめに

盆行事は旧暦7月中旬に先祖の霊を迎え、祭り、送る行事である¹⁾。近代以前、先祖の霊は盆花採りと迎え火によって迎えられ²⁾、精霊送り³⁾と送り火⁴⁾によって送られると信じられていた。盆花は、盆の期間中、盆棚や墓等に供えられるキキョウやオミナエシ、シキミ等の草花や常緑樹で、それらを盆前に野山から採取することを盆花採りといった⁵⁾。先祖の霊を祭るために盆棚が作られ、そこにはごぎ等が敷かれ、位牌、盆花、野菜、食べ物、盆箸、精霊馬、水鉢等が供えられた⁶⁾。盆棚の周りを野生植物で飾ったり、敷物、盆箸、精霊馬の足、皿等に野生植物を用いたりする場合もあった。精霊送りでは、盆棚の盆花等の供物が川や海に流されたり、墓等に並べられたりした。盆花や盆棚に用いられた野生植物は先祖の霊の依り代であったと考えられている⁷⁾⁸⁾。

こうした家々の盆行事は日本の津々浦々で行われ、盆花に用いられる植物⁵⁾⁹⁾、盆棚の形態や設置場所、盆棚に迎えらるる霊⁶⁾¹⁰⁾¹¹⁾は地域によって様々であった。盆行事の起源は定かでないが、日本

固有の祖先祭祀に7世紀に中国から伝来した寺院での仏教行事の盂蘭盆会が習合したものと考えられている¹⁾。野生植物を用いる盆花採りは、仏教以前の風習ではないかと推測されている⁸⁾。

近年、伝統的な盆行事は、家族構成や家屋構造の変化等に伴い消滅を余儀なくされているといわれる¹²⁾。一方、代表的な盆花であったキキョウやオミナエシは、戦後の里山の自然環境の変化によって全国的に絶滅の危機に瀕している^{13)~16)}。野の花の生育地の減少は盆花採りにも影響を与えてきたと考えられているが¹⁷⁾、その実態は明らかになっていない。

長野県でもかつてキキョウとオミナエシが盆花として広く利用されていたが¹⁸⁾、戦後里山の自然環境が大きく変化し¹⁹⁾²⁰⁾、2002(平成14)年にキキョウは県の絶滅危惧種に指定されている²¹⁾。

そこで本研究では、長野県の野の花の生育地の消失が盆花採りに与えた影響を把握するため、1955～1965年(昭和30年代)の盆行事とその変化について、特に盆花利用に焦点を当てた聞き取り調査と1955～1965年の盆棚の再現を行い、盆花採りの衰退要因と考えられた牛馬飼育と草地利用、薪炭利

1 長野県環境保全研究所 自然環境部 〒381-0075 長野県長野市北郷 2054-120

2 現：国立環境研究所 気候変動適応センター 〒305-8506 茨城県つくば市小野川 16-2

用、圃場整備、農家の兼業化、ニホンジカによる食害について統計類を用いて検証し、長野県の盆花採りの衰退過程を考察する。また、長野県の伝統的な盆花利用の特徴を把握するため、最初に近代の全国の盆花利用についても概観する。

2 研究方法

2.1 対象地域の概況

長野県は本州中央部の中央高地に位置する（図1）。1955（昭和30）年以降人口はほぼ横ばいであるが、世帯数は増加し続け、核家族化が進んでいる。人口・世帯数・世帯当たり人員は、1955年は2,021,292人・407,770世帯・4.9人、2015（平成27）年現在2,098,804人・807,108世帯・2.6人となっている²²⁾。1955年の産業別就業者の割合は第一次産業が最も多く57%を占めていたが、1965（昭和40）年には40%を下回り、2015（平成27）年現在9%となっている²²⁾。1955年の農産物販売額一位部門別農家数は稲作、養蚕、麦作の順で多かったが、1965年以降養蚕と麦作の順位は減少し、野菜と果樹類に置き換わっている^{23) 24)}。

2.2 近代の長野県の盆行事と盆花利用

「長野県史」^{25) 26)}によれば、長野県の盆行事は8月に行われることが多かった。盆花採りは「盆花迎え」とも言われ、13日までにキキョウやオミナエシ等が特定の山から採取された。山がなく盆花採りができない地域では、盆花は町のお花市で買い求められた。

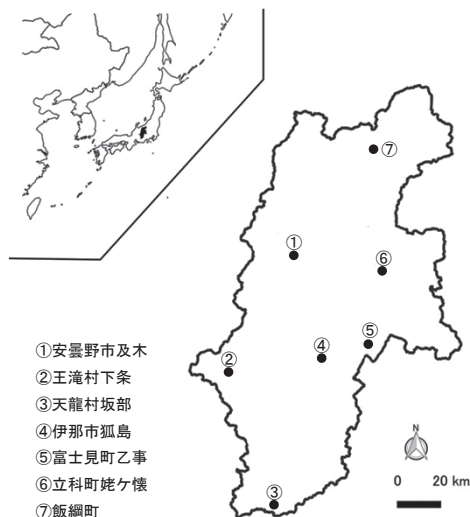


図1 対象地域

13日の迎え盆には盆棚が設置され、盆花が供えられ、夕方になると迎え火が焚かれた。迎え火は、墓で焚いてから門口でも焚く地域が多かったが、川端や門口だけで焚く地域もあった。この時ほとんどの地域で「ボンサン、ボンサン、コノケムリニotte、オイデクダサイ」等先祖を迎えるための唱え言がなされた。迎え火は、蠟燭や線香に移され盆棚に運ばれた。迎え火の後、先祖を背負って盆棚を迎える仕草をする地域、先祖を風呂に入れるといい、しばらく風呂の蓋をとったままにする地域もあった。

迎え火が盆棚に移されると、盆棚には地域により、ごはん、うどん、天ぷら等が供えられた。この時盆棚の前で家族が先祖と食事を共にする地域もあった。盆期間中、盆棚には様々な食べ物が供えられ、「水向け」といいミソハギ等で水を位牌や野菜等に振りかけたりする地域もあった。15日か16日に行われた送り盆には、盆棚の供物が川や墓等に送られ、夕方迎え火と逆の順序で送り火が焚かれた。

新仏（前年の盆以降に亡くなった家族の霊）のある家では、盆棚の周りに盆提灯を飾ったり、長期間盆棚を設置したりすることが多かった。新仏が迷わず帰ってこられるように、高灯籠を建てる地域、108本の松明を焚くヒャクハツタイを行う地域もあった。

県内の市町村誌によれば、県内の盆棚の形態には、普通の棚が最も多かったが、植物を四隅に立てて上部に蔓や棒を渡しホオズキやサンショウ、ササゲ等を吊るした棚、四隅の植物が2本に簡略化された棚、上部の蔓等が省略された棚、四周に植物を立てた棚、それに屋根を付けた棚もあった。盆棚を座敷や居間に仏壇と別に作った地域が多かったが、仏壇を盆棚とした地域もあった。盆棚に市販のごさを敷く地域もあったが、野生植物や野生植物を編んだごさを敷く地域が多かった。四隅に立てる植物にはタケ、ススキ、ナラ、クリ、周囲に立てる植物にはヤナギやミソハギ、敷物にはススキ、ガマ、マコモ、ヨシ等が用いられた。精霊馬の足や盆箸にススキ、カンゾウ、皿にカシワ、ホウノキ等の葉、水鉢に添える植物としてミソハギ、ハギ等を用いる地域もあった。迎え火の燃料には、地域によって麦藁、麻殻、「カンバ」といわれるシラカンバの樹皮、アカマツやヒノキの松明等が用いられていた。

2.3 調査方法

「日本民俗資料選集」の盆行事Ⅰ～Ⅶ^{12) 27) ~ 32)}は、

文化庁が1977（昭和52）年に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定した山形県、新潟県、茨城県、埼玉県、長野県、静岡県、京都府、大阪府、岡山県、高知県の盆行事について、1978～1990（昭和53～平成2）年に各府県4～30事例地域で慣行・儀礼・用具・供物を調査・記録したものである。これらを用いて、近代の各府県の盆花の種類、盆花の調達先、盆花を供えた場所、盆棚の形態と祭られた先祖の種類、精霊送りで盆花が送られた場所について整理し、近代における全国の盆花利用を概観した。

聞き取り調査は、全県に概ね均等に分布する7事例地域（安曇野市及木、王滝村下条、天龍村坂部、伊那市狐島、富士見町乙事、立科町姥ヶ懐、飯綱町、図1）で、各地域4～7名を対象に行った。調査項目は、1955～1965年の盆花利用、盆花採りの衰退時期とその要因、現在までの盆行事の変化で、調査時間は約2時間とした。また、1955～1965年の盆花利用を視覚的に把握するため、各地で当時の盆棚を自宅や公民館で再現してもらい、写真画像として記録した。調査期間は2015年7～8月であった。調査対象者は合計40名で、調査時の平均年齢は77歳であった。1955～1965年を取上げたのは、長野県では1965年まで多くの家で農業を中心とした生業が営まれており、伝統的な盆花利用が行われていたと考えられたためである。

それらの結果から、事例地域における盆花採りに関する語りを類型化し、1955～1965年と2015年現在の盆花とその調達先、1955～1965年の盆棚祭り・精霊送り・迎え火・送り火、盆花採りが衰退した時期とその要因、盆行事の変化とその要因について整理した。

盆花採りの衰退要因として考えられた牛馬飼育と草地利用、薪炭利用、圃場整備、農家の兼業化、ニホンジカによる食害については、1884（明治17）年以降の長野県の牛馬飼育農家数と牛馬数²³⁾²⁴⁾³³⁾、1903（明治36）年以降の長野県の草地面積²³⁾²⁴⁾³⁴⁾、1924（大正13）年以降の長野県の薪炭生産量²³⁾³³⁾、1966（昭和41）年以降の長野県の水田と畑の圃場整備済面積と未整備面積³⁵⁾、1941（昭和16）年以降の長野県の専業別農家数³⁶⁾、1975（昭和50）年以降のニホンジカによる農林業被害額の推移³⁷⁾³⁸⁾³⁹⁾を用いて検証した。

3 近代における全国の盆花利用

お盆には、先祖・新仏・無縁仏の3種類の霊が訪れると考えられていた⁴⁰⁾。先祖は亡くなってから1年ないし3年以上経っているかつての家族の霊、新仏は亡くなってから1年ないし3年を経っていない家族の霊、無縁仏は祭り手のいない霊（家とは無関係の諸霊、祭り手を残さなかったかつての家族の霊）とされる⁴¹⁾。これらの霊を祭る盆棚（仏壇や墓に作る棚は除く）の形態は、12類型に分類されている（表1）。

表2に近代の10府県の盆花利用を示す。盆花は盆市や金物屋等で購入されたり、庭で栽培されたりする場合もあったが、京都府以外の全地域で、野山で採取されていた。地域によって様々な植物が利用されていたが、長野県以東ではキキョウ、オミナエシ、静岡県以西は常緑樹のシキミが多く用いられていた。盆花は全地域で盆棚に供えられ、長野県と京都府以外の地域では墓にも供えられていた。長野県以東では毎年盆棚を屋内に一つだけ作り、先祖も新仏もそこに祭るのに対し、静岡県以西では先祖と新仏、無縁仏を別の棚で祭る場合があり、縁側、庭先、門先、河原、浜等屋外に棚を作る場合もあった。盆棚の形態は、長野県以東ではI型・J型・K型がほとんどであるのに対し、静岡県以西はそれらの他にもA型・C型・D型・F型・G型・H型があった。精霊送りで盆花が送られた場所は川が最も多く、海、墓や辻等の地域もあった。

盆棚を屋外に設置する事例や、新仏や無縁仏の棚を先祖の棚と別に作る事例が西に偏っていることは既に指摘されている⁶⁾¹⁰⁾。日本の東西で先祖祭祀の

表1 日本における盆棚の類型

類型	特徴
A型	・小石を積み重ねたもの。砂を盛ったもの。
B型	・砂を盛り固めた埋。家の門口等に作る。
C型	・1本の柱の上に板または箱の類を載せたもの。
D型	・上から吊る棚。
E型	・桶を伏せて、その上に供物をする型。または桶の上部を菰等で巻き、麦藁帽子等を被せたもの。
F型	・四隅に笹竹を立てる型。
G型	・棚の周囲を稲葉・麦藁等で被い祭壇とするもの。
H型	・G型に屋根を付けたもの。
I型	・仏壇の前、もしくは座敷の一隅等に台を置き、四隅に笹竹を立て、それに縄を張り、ほおずき・林檎その他の実、稲・粟等の穂、うどん・そうめん等をかける。台の上には新しい菰を敷き、その上に供物をする。
J型	・I型の4本柱が2本に簡略化されたもの。鳥居型になったものもある。
K型	・箱その他を台にし、その上に戸板等を載せ棚とするもの。 ・台は置かず直接畳の上に板を敷いたもの。
L型	・家の門口等に設ける砂盛でない台。

・高谷⁶⁾を元に作成した。

表2 近代の10府県の盆花利用

都道府県	盆花に利用された植物	調達先	供える場所	盆棚の形態(祭る霊)	送る場所
山形県	キキョウ, オミナエシ, ミソハギ, ススキ, ハギ, ノギク, ユリ, カヤ, ヒガンザクラ, チョウセンギク	野山, 盆市	墓 仏壇, 座敷	J型, I型	川, 海
茨城県	オミナエシ, ナデシコ, ハギ, キキョウ, ミソハギ	野山, 近村, 花屋	墓 座敷	I型, J型	墓, 川, 海, 敷
埼玉県	ミソハギ, キキョウ, ハギ, オミナエシ, シキミ, ナデシコ, リンドウ, オトコエシ, ユリ, ノギク	野山, 畑, 庭, 花屋	墓 座敷 縁側	I型, J型 I型, J型	川, 墓, 辻
新潟県	ミソハギ, ススキ, クサキョウチクトウ, ヒャクニチソウ, ハギ, ケイトウ, セツカバナ, キク, ヒヨドリソウ, オトコエシ	野山, 畑, 庭, 盆市	墓 仏壇, 座敷	I型, J型	川, 海, 墓
長野県	キキョウ, オミナエシ, ナデシコ, ススキ, ミソハギ, オトコエシ, リンドウ, マツムシソウ, フジバカマ, キク	野山, 盆市	座敷	I型, J型, K型	川, 墓
静岡県	シキミ, ミソハギ, ヤマユリ, オミナエシ, オトコエシ, オニユリ, キキョウ, キク, サカキ, ダリア	野山, 畑, 庭	墓 仏壇, 座敷 縁側, 軒先, 庭先, 門口	I型, J型, K型(先祖) F型, G型(新仏), 竹筒(無縁仏)	川, 海, 敷, 辻
京都府	コウヤマキ, シキミ, ミソハギ	寺, 花屋	仏壇 軒先	K型(先祖, 新仏), G型(新仏) D型(新仏)	川
大阪府	シキミ, ミソハギ, ハス, オミナエシ, キキョウ, コウヤマキ, ナデシコ, カルカヤ, ケイトウ, カノコユリ	近村, 荒物屋, 畑, 庭, 野山	墓 仏壇 縁側, 軒先, 庭先, 門口	K型(先祖, 新仏, 無縁仏), J型(先祖), G型, H型(新仏) K型, G型, H型(新仏), K型, D型(無縁仏)	川, 海, 墓, 辻
岡山県	シキミ, ミソハギ, キキョウ, ケイトウ, ヒサカキ, オミナエシ, キク, ハス, ヒャクニチソウ, ホウセンカ	野山, 畑, 庭, 店	墓 仏壇, 座敷 庭先, 門口	K型(先祖) G型(先祖, 新仏, 無縁仏)	川, 海, 墓
高知県	シキミ, ミソハギ, クリ, キキョウ, カキ, ササ, サカキ, ハギ, ノリウツギ, カヤ	野山	墓 仏壇 雨だれ落ち, 縁側, 門口 河原 浜	K型(先祖), G型(先祖), J型(先祖, 新仏) J型, H型(先祖), G型(先祖, 新仏) A型, G型(新仏), F型, H型(無縁仏) A型(先祖), G型(新仏)	川, 海, 墓

・「日本民俗資料選集」I～VII^{12)27)～32)}を元に作成した。盆花に利用された植物や調達先、送る場所は記載頻度が多い順に示した。下線は事例地域の半分以上で記載があった植物名を示す。盆花を供えた場所、盆棚の形態、祭る霊は記載があったものを全て掲載した。盆棚の形態のアルファベットは表1に対応する。

方法が異なる理由については、かつて先祖の霊の身分や区別が明らかでなかった時代には西日本では全ての霊が念のため屋外の棚で祭られていたのに対し、東日本ではそのように考えられず一様に室内の棚で祭られていた⁴²⁾、仏壇が浸透すると西日本で屋外に祭られていたものが次第に室内に引き寄せられていき、屋外の棚が新仏や無縁仏の棚と考えられるようになったのではないかと⁶⁾⁴⁰⁾、西日本では夏の気候が間接的要因となって、祭らなければ先祖の霊に危害を及ぼすものとして新仏や無縁仏が強く意識されたのではないかと¹⁰⁾等と推測されている。

4 長野県における1955～1965年の盆花利用とその変化

4.1 1955～1965年の盆花利用

調査対象者の1955年における平均年齢は17歳で、多くは当時少年・少女～青年であった。表3に盆花採りに関する語りとその類型、表4に1955～1965年と2015(平成27)年の盆花とその調達先を示す。盆花採りは子どもの仕事で、全地域で盆花採りに行ったという話が聞かれた(表3)。お盆前

は夏蚕を上簇する時期にあたり大人は忙しかつたからである。手伝いで採草地や畑に行った帰りに盆花を採ってきた子どももいた。盆花はキキョウ、オミナエシ、ナデシコ、ワレモコウ、フシグロセンノウ、ヤマユリ等で、キキョウとオミナエシは全地域で利用されていた(表4)。盆花の主な調達先は田畑の畦・土手、採草地、薪炭林で(表4)、各地に野の花がたくさん自生する場所があった(表3)。田畑の畦・土手、採草地はいずれも牛馬の糞を採取する場所でもあり(表4)、畦等では草刈りの際に盆花を残したり、お盆に花が咲くように芽を摘んだりしていた地域もあった(表3)。

表5に1955～1965年の各地の盆棚祭り・精霊送り・迎え火・送り火、図2に事例地域で再現された1955～1965年の盆棚の写真画像を示す。飯綱町では仏壇前、それ以外の地域では仏壇と別に盆棚が設置されていた。盆棚の形態はK型が最も多く、I型、G型もあった。盆花は全地域で盆棚に供えられていた。盆棚周りの飾り、敷物、精霊馬の足、水鉢、皿、盆箒には様々な野生植物が用いられ(表5)、地域によって多様な盆棚が作られていた(図2)。迎え火は墓と戸口、川端で焚かれ、先祖の霊を迎え

表3 盆花採りに関する語りとその類型

類型	語り
盆花採りは子どもの仕事だった	・私は林のそばに畑がたくさんあったので、その林に盆花を採りに行った（安曇野市、TMさん、82歳）
	・私は河原に盆花を採りに行って、早く行かなげりやみんな採っちゃうって。「朝早く起きて行け」って親に言われた（安曇野市、TFさん、75歳）
	・（盆花採りは）子どもの仕事だったからね（安曇野市、FNさん、76歳）
	・（盆花は）山に強力をひいて行った帰りに採ってきた（王滝村、SSさん、81歳）
	・（盆花は）子どもや女衆が採りに行った（天龍村、STさん、78歳）
	・13日に子どもは山に花を採りに行って、大人は蕨差を作った（伊那市、BYSさん、73歳）
	・川を渡って山に行けば盆花を採ってきた。かすかに採ってきた記憶があるかな。木が生えていて（伊那市、BSKさん、72歳）
	・子ども会で盆花を採りに行った（富士見町、MSさん、87歳）
	・盆花は何しろ毎年採りに行った（富士見町、SYさん、83歳）
	・盆花採りは迎え盆の当日午後ぐらいにやった。野山を飛んで歩いて、子どもの仕事だった（立科町、MHさん、71歳）
お盆前は養蚕が忙しかった	・私は盆花を青木湖に採りに行くわけ。バスに乗って帰ってくる。お金ももらってサイダーを飲んでくる。妹が泣くわけ。それを振り払って上だけ行く。これを全部力やで包むことが上手でね。上と下と全部力やで包んで帰ってくるの。花が駄目にならないように頭を切つてね（立科町、NYさん、71歳）
	・お盆の13日は「朝も涼しいうちに盆花採りに行ってこいや」と言われた（飯綱町、WEさん、79歳）
	・養蚕が忙しい時期だから墓掃除には誰が行っても良かった（安曇野市、KHさん、89歳）
	・蚕を沢山飼って、おら子どもの時は廊下で寝たんだ。家中蚕だらけだった。親達は蚕を飼って忙しかった（王滝村、TK1さん、71歳）
	・夏蚕をお盆の前あげちゃうのが仕事だった。大蚕だった（伊那市、BYSさん、73歳）
野の花がたくさん自生していた	・お蚕様の蛇ヶ懐もの。蚕を飼わない家はなかった。お蚕様がいた頃だから墓掃除など行っていらなかった（立科町、NKさん、73歳）
	・盆踊りから帰って来ても蚕だけはやったよね（飯綱町、MMさん、77歳）
	・林にはキキョウ、オミナエシやナデシコがいっぱいあってね。毎年出てくる（安曇野市、TMさん、82歳）
	・カリボシ山 ^{a)} にはオミナエシやマツムシソウはいくらでもいっぱいあったよ（王滝村、SSさん、81歳）
	・カリボシ山 ^{a)} にはキキョウとかオミナエシとかリンドウとかそういうものがいっぱいあった（王滝村、TK1さん、71歳）
	・キキョウやオミナエシは田んぼの土手にも生えていた。採れる、採れる（伊那市、BSGさん、72歳）
	・オミナエシは多かったんだよね（立科町、MHさん、71歳）
	・田の幅（畦）にキキョウやオミナエシなど花がいっぱい生えていた（飯綱町、WEさん、79歳）
	・キキョウはお盆に花が咲くように母親が芽を揃んでいた（飯綱町、MMさん、77歳）
	・お盆に花が咲くように、一番草を刈る頃親にキキョウの頭を揃えておけと言われた（飯綱町、WEさん、79歳）
盆花を管理していた	・親達は草を刈る時それ（水田の畦の盆花）を残しておいた（飯綱町、WEさん、79歳）
	●水田の圃場整備で畦や土手の盆花がなくなった
	・及木の構造改善 ^{b)} は1968年頃で真っ先だった（安曇野市、TKさん、82歳）
	・1975年の構造改善 ^{c)} で土手が三面張りになって盆花もクズもなくなった（安曇野市、KHさん、89歳）
	・1960年に水田の土地改良 ^{d)} をしてから盆花がなくなった（伊那市、BS1さん、72歳）
	・1971年頃圃場整備 ^{e)} をした際、畦を補強するために牧草の種を撒いたら花がなくなった（立科町、NKさん、73歳）
	・昭和40年代の構造改善 ^{f)} で盆花が咲いた畦がなくなった（飯綱町、OFさん、83歳）
	●牛馬の飼料のために草を刈らなくなり盆花がなくなった
	・1960年頃から牛馬を飼う人がどんどん減ってきて、農業が機械化して、草刈りを盛大にやらなくなると、木が大きくなって絶えてしまった（王滝村、TKさん、71歳）
	・牛馬や山羊は1965～1975年頃にはいなくなっていた。1975年には盆花はなくなっていた（天龍村、SYさん、84歳）
野の花の生育地がなくなり盆花採りに行かなくなった	・1965年頃になると牛がいなくなり花がなくなった（伊那市、BS1さん、72歳）
	・1961、1962年以降馬の飼育を辞めて、耕運機を用いるようになると、草刈りに行かなくなり、1965年には原の草花はほとんどなくなった（富士見町、MSさん、87歳）
	・草を刈らなくなると盆花は段々小さくなって絶えた。オミナエシも弱い花で、草に覆われると本当に小さくなってしまった（飯綱町、WEさん、79歳）
	●薪を利用しなくなると山が荒れ盆花がなくなった
	・1975年以降薪を利用しなくなった（伊那市、BYSさん、72歳）
	・山から花がなくなったのと囲炉裏で火を焚かなくなったのは同時進行だったと思う。1965年以降になると生活改善でガスが主流になってきた。かつては荒れている山はなかった（飯綱町、MMさん、77歳）
	●刈払い機で草を刈るようになり盆花を残せなくなった
	・山の畑の周りを機械で草刈りをするようになると花が残せなくなった（立科町、NKさん、73歳）
	・構造改善で農業が機械化され、草刈りにも機械が用いられるようになってからは花を残せなくなった（飯綱町、MMさん、77歳）
	●シカの食害で盆花がなくなった
・シカの食害で、山に花がなくなった（天龍村、SKさん、80歳）	
・2005年頃まではシカでそんなに騒がなかった（天龍村、MHさん、63歳）	
●農地開発で盆花を採った薪炭林がなくなった	
・林が構造改善 ^{g)} で畑になった（安曇野市、TMさん、82歳）	
動めに行くようになり盆花採りに行かなくなった	・1962年頃に冬の仕事が無くなると、動めに行くようになった。1968年に農業構造改善事業が行われ農業の機械化がすすむと、さらに現金収入が必要になり忙しくなった（安曇野市、TKさん、82歳）
	・1965年頃から動めに行くようになり、家を建てたりすると、さらに忙しくなった。（安曇野市、KHさん、89歳）
	・1960年頃就職し、山に行かなくなった（伊那市、BYSさん、72歳）
山から野の花を掘り採って庭や畑に植えた	・親父やお袋たちはオミナエシやワレモコウを高原から採ってきて田んぼの畦や畑の幅に植えていた（王滝村、TK1さん、71歳）
	・昭和40年代以降になって山に草花が無くなったら、屋敷へオミナエシを植えたりキキョウを植えたり。それをお盆花に使っている（富士見町、MSさん、87歳）
	・最後の方になるとみんな（山からユリを）うちに持ってきて植えていたけれどね（飯綱町、MMさん、77歳）
盆花を買うようになった	・1971年頃になるとスーパーで盆花を買ったり、近所で栽培した花を頂いたりするようになった。こだわらなくなり、信心がなくなった（安曇野市、KHさん、89歳）
	・1975年には農協で盆花の注文をとったりしていた（伊那市、BSYさん、72歳）

・聞き取りによる。

a) 牛馬の冬季の飼料となる干草を採取するための草地。 b)1966（昭和41）年の農業構造改善事業により及木の南西部で圃場整備が実施された⁴³⁾。 c)1977～1983（昭和52～58）年に県営ほ場整備事業明盛地区により21.6haが圃場整備された⁴⁴⁾。 d)1962～1972（昭和37～47）年の竜東土地改良事業（積寒土地改良事業、農業構造改善事業、県土地改良事業）で圃場整備が実施された⁴⁵⁾。 e)1971～1972（昭和46～47）年の振興山村農林漁業特別開発事業で圃場整備が実施された⁴⁶⁾。 f)1966～1968（昭和41～43）年の第一次構造改善事業、1971～1975（昭和46～50）年の第二次農業構造改善事業で圃場整備が実施された⁴⁷⁾⁴⁸⁾。 g)1970（昭和45）年の県営ほ場整備事業中信用左岸地区で圃場整備が実施された⁴⁹⁾。

表4 事例地域の1955～1965年と2015年現在の盆花とその調達先

事例地域	1955～1965年		2015年	
	盆花	調達先	盆花	調達先
①安曇野市及木	キキョウ, オミナエシ, ナデシコ, ワレモコウ, ミソハギ, ススキ, ヒャクニチソウ	水田の畦・土手, 薪炭林, 庭	リンドウ, サルスベリ	
②王滝村下条	キキョウ, オミナエシ, リンドウ, マツムシソウ, ヤマユリ, ナデシコ	採草地	キキョウ, オミナエシ, ミソハギ, ワレモコウ, ヤナギ, サルスベリ, ダリア, リンドウ, ヒマワリ	
③天龍村坂部	キキョウ, オミナエシ, フシグロセンノウ, ミズヒキ, チョウセンギク, ミソハギ	田畑の畦, 墓	-	
④伊那市狐島	キキョウ, オミナエシ, ワレモコウ, ミソハギ, ヤマユリ	水田の畦, 薪炭林, 採草地, 庭	アスター, エゾギク, グラジオラス, ユリ	庭, 畑, スーパー, 直売所, 知人からもらう, 山, 河原
⑤富士見町乙事	キキョウ, オミナエシ, ナデシコ, ヤマユリ, ハギ, ススキ	採草地	キキョウ, オミナエシ, キク, カーネーション, ハギ, ススキ	
⑥立科町姥ヶ懐	キキョウ, オミナエシ, ナデシコ, ワレモコウ, フシグロセンノウ, ミソハギ, オニユリ	田畑の畦	アスター, ヒマワリ, グラジオラス	
⑦飯綱町	キキョウ, オミナエシ, ナデシコ, コオニユリ, フジバカマ, フシグロセンノウ, ミソハギ	水田の畦, 薪炭林, 庭	キキョウ, オミナエシ, ミソハギ, ヒャクニチソウ, アスター	

・聞き取りによる。太字は野山で採取されたもの、下線は秣の採取地でもあった場所を示す。

表5 事例地域における1955～1965年の盆棚祭り・精霊送り・迎え火・送り火

項目	①安曇野市及木	②王滝村下条	③天龍村坂部	④伊那市狐島	⑤富士見町乙事	⑥立科町姥ヶ懐	⑦飯綱町	
盆棚祭り	形態	I型	G型	K型	K型	K型	K型	
	設置場所	座敷	座敷	座敷	座敷	座敷	座敷	
	周りの飾り	ススキ, 花が付いたクズの蔓	ヤナギ	-	-	-	-	-
	敷物	薄緑	ヤナギ	テガヤ	マコモ	ススキ	ススキ	マコモ
	精霊馬の足	割り箸	ヤナギ, ススキ, オミナエシ	割り箸	ススキ, カンゾウ	ススキ	ススキ	横枝
	水鉢	ミソハギ	-	シキミ	ミソハギ	ハギ	-	ミソハギ
	供物の皿	サトイモの葉	ホオノキ・モクレンの葉	-	クズ・カボチャ・カキの葉	カボチャ・ユウガオの葉	-	カボチャ・ユウガオ・ハス・サトイモの葉
	盆箸	-	ハギ, ネコヤナギ	-	ススキ	ススキ, カンゾウ	-	-
供物	野菜, うどん, 天ぷら, 切り昆布・干揚げ ^{a)} の煮付け, ご飯	野菜, 天ぷら, おはぎ	野菜, うどん, 天ぷら, ヒューナ ^{b)} の胡桃和え	野菜, 胡桃, 落ち着きの団子 ^{c)} , 天ぷら, 素麺, あんころ餅, いなり寿司, 巻き寿司, 蓮華茄子 ^{d)}	野菜, 素麺, ほうとう, 小豆と荳胡麻のおはぎ, 餅, 天ぷら	野菜, 素麺, せんべい, 饅頭	野菜, 天ぷら, おやき	
精霊送り	場所	堰	川	石碑や大木の下等	川	墓	墓	
	供物を包む物	薄緑	ヤナギ	テガヤ	マコモ	ススキ, 箕	ススキ	
迎え火・送り火 ^{e)}	場所	墓, 戸口	墓	戸口	墓, 戸口	川端	墓, 戸口	
	燃料	市販のカンパ	ヒノキの松明, カンパ	アカマツの松明	大麦藁	麻殻	小麦藁	
	唱え言	-	-	「南無阿弥陀仏」	「お迎え万灯, お迎え万灯」	「盆様, 盆様, このあかりで来ておくれ」	「盆さん, 盆さん, この煙ののって来ておくんない」	「じいやん, ばあやん, この火のあかりでおいでなして」
	その他風習	先祖を背負う格好をして家に帰る	-	-	-	先祖を背負う格好をして家に帰る	-	

・聞き取りによる。太字は野生植物を示す。a) 薄い油揚げ。b) 日照りに強い雑草。c) 団子の胡桃和え。d) 茄子の先を切り紫蘇に包んだ胡桃を挟んで蓮の花の形にして煮た味噌汁。e) 迎え火の場所・燃料と同じ。

るための唱え言がなされた地域も多く、先祖を背負う格好をして家に帰ってくる地域もあった(表5)。迎え火の燃料に、野生植物を用いた地域もあった。迎え火の後、盆棚には地域によって様々な食べ物が供えられていた。送り盆には、盆棚の供物や敷物が川や用水路に流されたり、墓や石碑前に並べられたりしていた。送り火は迎え火と逆の順序で焚かれ、送るための唱え言も同様になされていた。

4.2 盆花利用の衰退時期とその要因

盆花採りは、ほとんどの地域で1960～1975(昭和35～50)年に行われなくなり、2008年以降行わなくなった地域もあった(図3)。1960～1975年に盆花採りに行かなくなった理由として、全地域で野の花の生育地がなくなったことがあげられていた(表3)。野の花の生育地がなくなった主な要因としては、牛馬飼育と秣の採取の減少、薪の利用の減少、水田の圃場整備の進展、草刈りの機械化があげられた。当時山の野の花が減少すると、親たちは



図2 事例地域で再現された1955～1965年の盆棚
・2015年8月著者撮影。①～⑦は図1に対応。

山から野の花を掘り取って庭や田畑に植えていたという話も各地で聞かれた。安曇野市など平坦地では、農業から勤めを中心とした暮らしに変化したことも盆花採りに行かなくなった理由としてあげられていた。また、2008年以降盆花採りに行かなくなった理由としては、ニホンジカの食害で野の花自体がなくなったことがあげられていた。

4.3 2015年現在の盆行事

2015年現在、盆棚や仏壇には庭等で栽培されたり、スーパーや直売所で購入されたりした花が盆花として供えられている(表4)。盆花には、キキョウやオミナエシの他、アスター、トルコキキョウ、リンドウ、グラジオラス、ヒマワリ等様々な園芸植物が用いられている。

盆花採り以外の盆行事も変化している(表6)。盆棚を仏壇で代用したり、盆棚に用いる野生植物を

栽培・購入・省略したり、盆棚に供える食べ物を購入・省略したりする家が増えている。迎え火等の燃料が購入されるようになり、付随する風習も衰退している。川や用水路への精霊送りは行われなくなり、盆棚の供物は燃えるゴミとして出したり、畑に埋めたりして処分されている。こうした変化の要因としては、生活様式・家屋構造・家族構成の変化、身近な自然環境の変化、盆用品の商品化の進展、役場等による精霊送りの禁止等があげられていた。

5 盆花採りの衰退要因

以上から長野県の盆花採りが衰退した要因として、牛馬飼育と草地利用、薪炭利用、圃場整備、ニホンジカによる食害、農家の兼業化が考えられた。ここでは、それらの要因について統計類を用いて検証する。

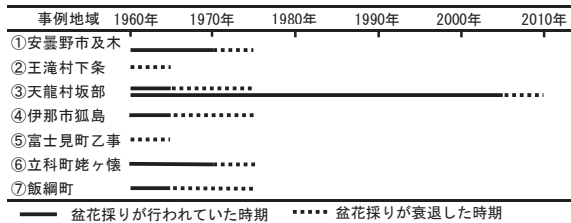


図3 事例地域で盆花採りが行われていた時期・聞き取りによる。

5.1 牛馬飼育と草地利用

図4に1884(明治17)年以降の長野県の牛馬飼育農家数と牛馬数を示す。1884年には馬が5.9万頭、牛が0.2万頭で馬が多かった(図4)。馬数は1888(明治21)年に7.3万頭と最高となるが、以後減少し、1955(昭和30)年には2.2万頭、1975(昭和50)年には400頭、1994(平成6)年には210頭となった。牛は1935(昭和10)年以降急増し、1943(昭

表6 盆行事の変化とその要因

項目	変化	要因	
盆棚祭り	設置場所	・盆棚を仏壇で代用するようになった(王滝村, 天龍村, 富士見町, 立科町)	<ul style="list-style-type: none"> ・勤めに行くようになり忙しくなった(安曇野市, 王滝村, 伊那市, 立科町) ・山に行かなくなった(天龍村) ・家を建て替え、盆棚を飾る場所がなくなった(安曇野市, 富士見町) ・核家族化や高齢化がすすみ、手がなくなった(安曇野市, 王滝村, 伊那市, 立科町) ・圃場整備やシカの食害で盆行事に用いていた野生植物の生育地がなくなった(安曇野市, 天龍村, 伊那市, 富士見町, 飯綱町) ・麦や麻の生産を行わなくなった(伊那市, 富士見町, 飯綱町) ・スーパーやホームセンター, 直売所, 寺等で盆用品を売るようになった(全地域) ・1955年頃から役場等から供物を川や堰に流してはいけないと言われるようになった(安曇野市, 王滝村, 伊那市, 飯綱町) ・役場から鳥や獣が来るため墓に供物を置いてはいけないと言われるようになった(富士見町)
	構成要素	<ul style="list-style-type: none"> ・盆棚周りの飾り, 敷物, 精霊馬, 水鉢, 賽の目茄子を省略するようになった(安曇野市, 王滝村, 天龍村, 伊那市, 飯綱町) ・市販の棚やテーブル, 敷物, 盆箸, 皿を用いるようになった(安曇野市, 天龍村, 伊那市, 富士見町, 立科町) ・精霊馬の足に楊枝や割り箸を用いるようになった(伊那市, 立科町) ・盆棚周りの飾りや敷物に用いる植物を遠くまで採りに行くようになった(安曇野市, 天龍村) ・盆棚周りの飾りや敷物に用いる植物を栽培するようになった(安曇野市, 伊那市, 立科町) ・敷物や精霊馬の足, 盆箸にススキを用いるようになった(天龍村, 富士見町) 	
	供物	<ul style="list-style-type: none"> ・ご馳走を作らなくなった(伊那市, 富士見町, 立科町, 飯綱町) ・三度三度食事を供えなくなった(富士見町) ・購入した盆菓子を備えるようになった(安曇野市, 飯綱町) 	
精霊送り	<ul style="list-style-type: none"> ・川に供物を流さなくなった(安曇野市, 王滝村, 伊那市, 飯綱町) ・墓に供物を持っていかなくなった(富士見町) ・供物は燃えるゴミに出したり, 家で燃やしたり, 畑に埋めたりするようになった(王滝村, 伊那市, 富士見町) ・供物を新聞紙に包み, 墓に置いてくるようになった(飯綱町) 		
迎え火・送り火	<ul style="list-style-type: none"> ・唱え言をしなくなった(富士見町, 立科町) ・仏様を背負う格好をしなくなった(安曇野市, 富士見町) ・焚き物に, 稲藁, 豆殻, ススキ, 新聞紙, 蠟燭, 市販のカンパ, 麦藁, 提灯を用いるようになった(王滝村, 天龍村, 伊那市, 富士見町, 立科町, 飯綱町) 		

・聞き取りによる。

和18）年には馬を上回り、1956（昭和31）年には6.8万頭となるが、その後減少と増加を繰り返している。1957（昭和32）年以降、牛飼育は多頭化が進んでいる。

図5に1903（明治36）年以降の長野県の草地面積を示す。1903年に23.3万haあった草地面積は、1940（昭和15）年や1951（昭和26）年に一旦増加するものの減少し続け、1954（昭和29）年には5.3万ha、1975（昭和50）年以降は0.5万～1万haで推移している。

5.2 薪炭利用

図6に1924（大正13）年以降の長野県の薪炭生産量を示す。戦後の木炭と薪の生産量はそれぞれ約5万t・165万層積m³であったが漸減し、1955（昭和30）年頃一旦持ち直し5.5万t・31万層積m³となるものの1960（昭和35）年以降再び減少し、1975（昭和50）年には0.1万t・0.5万層積m³となった。

5.3 圃場整備

図7、8に長野県の1966（昭和41）年以降の田畑の圃場整備済面積と未整備面積を示す。田畑の圃場整備済面積は1966（昭和41）年から1990（平成2）年にかけて急増し、以降増加は緩やかとなっている。1966年・1975年・1990年の圃場整備済面積は、水田では1万ha・2万ha・4万ha、畑では0.5万ha・1.2万ha・2万haであった。

5.4 農家の兼業化

図9に1941（昭和16）年以降の長野県の専兼業別農家数を示す。第二種兼業農家数は1960（昭和35）年6.8万戸（全農家の30%）であったが、その後急増し、1975（昭和50）年には14万戸（全農家の70%）となった。

5.5 ニホンジカによる食害

図10にニホンジカによる農林業被害額の推移を示す。被害額は1975（昭和50）年頃から顕在化し、2007～2009（平成19～21）年に約7億円とピークとなり、その後は減少傾向にある。

6 盆花採りの衰退過程

明治初期の長野県の農業は主な肥料を刈敷や厩肥に依存していた⁵⁰⁾。刈敷は広葉樹の若枝や草、厩

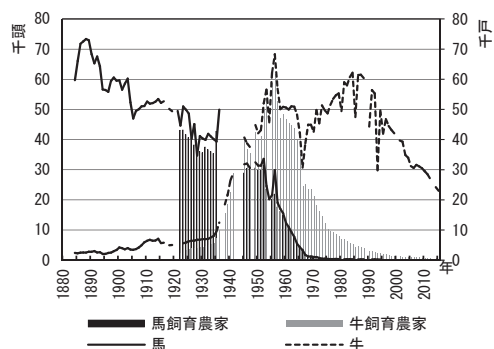


図4 1884年以降の長野県の牛馬飼育
・1884～1923年は農商務省統計表³³⁾，1924～1976年は農林省統計表³⁴⁾，1977～2015年は農林水産省統計表²⁴⁾を用いた。

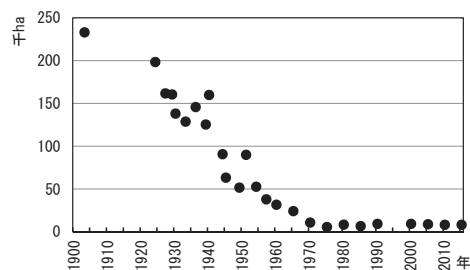


図5 1903年以降の長野県の草地面積
・1903年は市川³⁴⁾，1924～1976年は農林省統計表²³⁾，1977～2015年は農林水産省統計表²⁴⁾に掲載された林野面積のうち原野面積を用いた。原野は1940年までは「無立木地」、1970年以降は「森林以外の草生地」と表現されている。

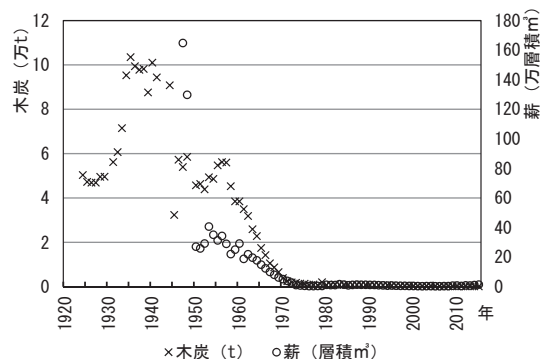


図6 1924年以降の長野県の薪炭生産量
・1924～1976年は農林省統計表²³⁾，1977～2015年は農林水産省統計表²⁴⁾に掲載された特用林産物の薪と木炭の生産量を用いた。

肥は牛馬の糞尿と草を混ぜ合わせ腐熟させたものである。厩肥は刈敷よりも速効性があり、農家はその生産に力を入れた。そのため、草地からは肥料となる草や秣が大量に採取されていた。

明治中期以降、水田に緑肥としてレンゲが導入され、養蚕が盛んになり現金収入が増えると金肥（油粕・大豆粕・魚肥）の購入が始まり、農地への草や厩肥の投入量が減少し採草量が減少した。戦後は化学肥料が普及すると、さらに採草量は減少した。

高冷地の長野県では発酵性の厩肥が重要で、馬が多く飼育されていた³⁴⁾。牛馬は代掻きや運搬にも用いられており、明治中期以降馬耕が普及すると馬は耕起にも利用されるようになった。1935（昭和10）年以降馬が徴発を受け役畜が不足すると、馬に比べ少ない飼料で飼育できる朝鮮牛が導入された。しかし1956（昭和31）年以降、ガーデントラクターや自動耕運機が普及すると、役畜であった牛馬は減少し、肉生産を目的とした牛の多頭飼育が始まった。牛の飼育目的の変化は、飼料を野草から濃厚飼料や牧草へと変化させたと考えられる。

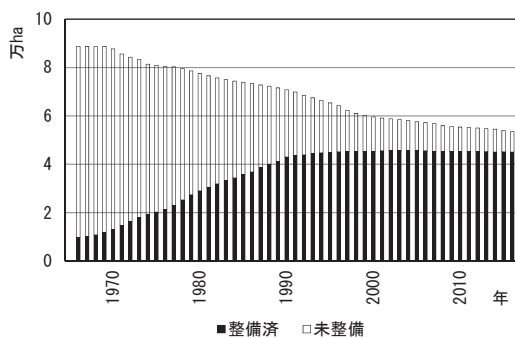


図7 1966年以降の長野県における水田の圃場整備面積と未整備面積³⁵⁾

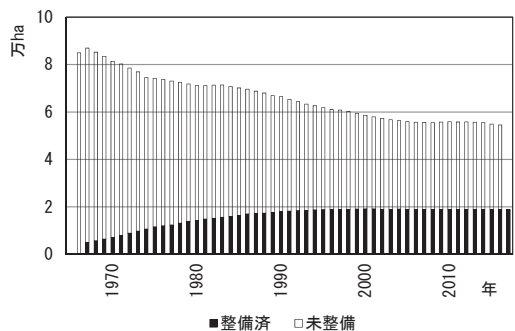


図8 1966年以降の長野県における畑の圃場整備面積と未整備面積³⁵⁾

また、長野県では燃料として主に薪や木炭が利用されていたが、戦後石炭、1960年以降石油やガスが普及した¹⁹⁾。石油やガスの普及により、炊事や暖房に用いられていたカマドやイロリはガスコンロや石油ストーブへと変化した⁵¹⁾。薪炭利用の減少は、薪炭林の林相を見通しの良いものから階層構造が発達したものへと変化させた¹⁹⁾。

圃場整備は耕地の利用度を高めるために行われる区画整理を指す⁵²⁾。戦後、耕地整理法が土地改良法に改組されると、圃場整備は大規模な公共事業により急速に進んだ。1961（昭和36）年に農業の機械化による農業生産性の向上を目指す農業基本法が制定されて以降は農業構造改善事業⁵³⁾、県営圃場整備事業⁵⁴⁾等によって大区画の圃場整備事業が進められてきた。近年の水田の圃場整備は区画の大型化（1区画30～45a）、農道の整備・拡幅・暗渠排水による乾田化、用排水路のライニング（コンクリー

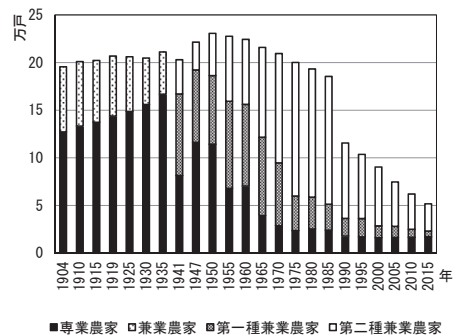


図9 1941年以降の長野県の専業別農家数³⁶⁾
・兼業農家は1941（昭和16）年以降第一種兼業農家と第二種兼業農家に分類される。

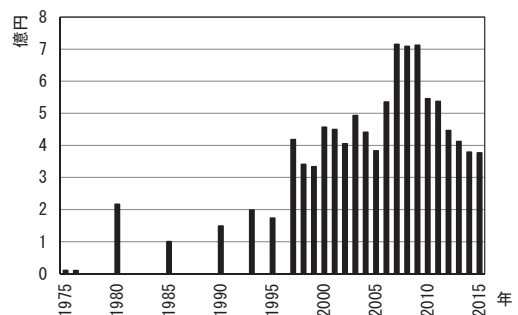


図10 1975年以降のニホンジカによる農林業被害額の推移
・2002年以前は「特定鳥獣保護管理計画（ニホンジカ）」³⁷⁾、「第2期特定鳥獣保護管理計画（ニホンジカ）」³⁸⁾、2003～2015年は長野県林務部資料³⁹⁾による。

ト水路化）を特徴とし⁵⁴⁾、表土の取り去りと大規模な畦畔の改修を含む土地造成が行われることから、これまで水田にいた生物が全て取り除かれるだけでなく、整備後生息環境が大きく変化すると考えられている⁵⁵⁾。圃場整備は1990年にかけて進められていたことから、1960～1975年の田畑の畦や土手の野の花の生育地の消失には、圃場整備が進んだことに加え、秣としての草刈りが行われなくなったり、聞取り調査で聞かれたように（表3）、草刈りの機械化が進み、花が残せなくなったりしたことも原因であったと考えられる。

農業の機械化や圃場整備の進展は、1960年以降農家の兼業化を進めた⁵⁶⁾。長野県では1955（昭和30）年以降急速に工業化が進んだが、それは農家の農外所得を増加させ、農家の兼業化を促した。

1960～1975年の農家の第二種兼業化は、1961年に制定された農業基本法に基づく農業構造改善事業により、農家が余剰時間を農外就労に振り向けることができるようになったために進んだと考えられる。

長野県では、ニホンジカ（以下、シカ）は明治中期以降激減し、絶滅寸前に陥った⁵⁷⁾。1923（大正12）年に下伊那地域の一部が農商務省によってシカ捕獲禁止区域に指定され、1947（昭和22）年には県全域で狩猟獣からメスジカが除かれた。1950（昭和25）年の狩猟法改正に伴い、オスジカのみ狩猟獣となったが、下伊那地域では依然としてオスジカの禁猟措置が取られてきた。こうした禁猟措置の効果もあり、シカの個体数は回復するとともに農林業被害も増加し、1994（平成6）年にはオスジカの禁猟措置は解除され、2007（平成19）年にメスジカの捕獲禁止措置が廃止された。天龍村で盆花採りに行かなくなった2008～2009年は、シカによる農林業被害がピークとなった時期と一致していた。

以上から推測された長野県の盆花採りの衰退過程を図11に示す。1955（昭和30）年頃の長野県では多くの家が農業を中心とした生業を営み、役畜として多くの牛馬が飼育され、炊事や暖房等の燃料として薪炭が利用されていた。長野県では明治中期以降草地利用が減少し、戦後は薪炭利用も減少していたが、当時集落周辺には牛馬の飼料を採取する草地や明るい林が残っていた。

しかし、間もなく石油やガスの利用が始まり農業の機械化が進むと、牛馬の飼育目的が役畜から肉用へと変化した。1960（昭和35）年以降さらに石油

やガスが普及すると薪炭利用が減少し、1975（昭和50）年までに草や薪炭の利用がほとんど行われなくなった。また1960年以降、田畑の畦や土手では大規模な圃場整備や草刈りの機械化が進められた。その結果、1960～1975年に野の花が生育した草地や明るい林が急速に失われ、ほとんどの地域で盆花採りが行われなくなった。

また、農業の機械化や圃場整備の進展は1960年以降農家の第二種兼業化を進めた。特に平坦地では機械化や圃場整備が比較的早く進んだと考えられ、この時期に勤めを中心とした生活に変化したことも盆花採りの衰退を促した。

2007～2009年のシカによる食害の増加は、 कारणとして盆花採りが続けられてきた地域の一部でも野の花を消失させ盆花採りを衰退させた。

7 おわりに

本研究では、長野県の野の花の生育地の消失が盆花採りに与えた影響を把握するため、聞取り調査から1955～1965年の長野県の盆花利用とその変化を明らかにし、盆花採りの主な衰退要因として考えられた牛馬飼育と草地利用、薪炭利用、圃場整備、シカによる食害、農家の兼業化について統計類から検証し、盆花採りの衰退過程を考察した。

その結果、1955年頃の長野県では伝統的な盆花利用が続けられていたが、1960～1975年にほとんどの地域で野の花の生育地が消失し盆花採りが行われなくなったことが推測された。

かつての長野県の盆行事は、里山を介して先祖と親しく交流する機会であり、盆花は先祖の霊の依り

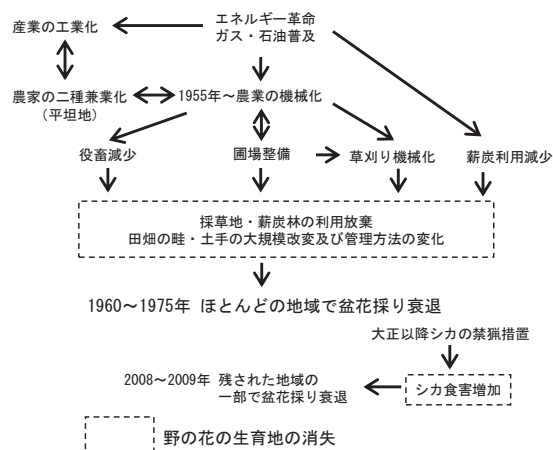


図11 長野県における盆花採りの衰退過程

代として重要な役割を担っていた。このことは、野の花の生育地の消失は、単に盆棚に飾る花がなくなったことにとどまらない影響を盆行事に与えたことを示唆している。

これまで伝統的な盆行事は社会環境の変化によって消滅を余儀なくされていると言われてきた¹²⁾が、本研究によって里山の自然環境の変化も少なからず影響を与えてきたことが把握された。

また、長野県におけるキキョウやオミナエシ等の生育地が消失した時期やその過程についてこれまで詳細には検討されてこなかったが、本研究によって1955年以降のエネルギー革命によって農業と人の暮らしが大きく変化し1960～1975年の間に急速に消失したことが推察された。

謝 辞

事例調査にあたっては、長野県農村文化協会の池田玲子様、岡里真砂子様、佐口幸子様、林 邦子様、関 京子様、馬場よし子様、三井清工門様、中澤米子様、宮本久子様には大変お世話になりました。ここに厚く御礼を申し上げます。

文 献

- 1) 長沢利明 (2006) 盆. 福田アジオ他編「精選日本民俗辞典」吉川弘文館, 483 - 484.
- 2) 柳田国男 (1946) 「先祖の話」筑摩書房 (2014年復刻版, KADOKAWA) .
- 3) 喜多村理子 (1999) 精霊流し. 福田アジオ他編「日本民俗大辞典 上」吉川弘文館, 860.
- 4) 喜多村理子 (1999) 送り火. 福田アジオ他編「日本民俗大辞典 上」吉川弘文館, 251.
- 5) 喜多村理子 (2000) 盆花. 福田アジオ他編「日本民俗大辞典 下」吉川弘文館, 556.
- 6) 高谷重夫 (1995) 「盆行事の民俗学的研究」岩田書院.
- 7) 喜多村理子 (1998) 盆と節供. 赤田光男・福田アジオ編「講座日本民俗学 6 時間の民俗」雄山閣, 170-184.
- 8) 湯浅浩史 (2015) 「植物でしたしむ, 日本の年中行事」朝日新聞出版.
- 9) 永松 敦 (1998) 盆花迎え. 佐々木宏幹他監修「日本民俗宗教辞典」東京堂出版, 523-524.
- 10) 小松理子 (1977) 盆棚 (二) - 設置場所を中心

- として - 民具マンスリー, 9(12), 5-8.
- 11) 小松理子 (1977) 盆棚 (三) - 棚の諸形態について - 民具マンスリー, 10(1), 8-12.
 - 12) 文化庁文化財部 (2013) 「民俗資料選集 44 盆行事 VII - 長野県 -」国土地理協会.
 - 13) 田端英雄 (1997) 「里山の自然」保育社.
 - 14) 養父志乃夫 (2009) 「里地里山文化論 下 循環型社会の暮らしと生態系」農文協.
 - 15) 須賀 丈・岡本 透・丑丸敦史 (2012) 「草地と日本人 日本列島草原 1 万年の旅」築地書館.
 - 16) 環境省編 (2014) 「レッドデータブック 2014 植物 I (維管束植物) - 日本の絶滅のおそれのある植物 -」
 - 17) 環境省自然環境局 (2002) 阿蘇の草原と住民との関わり～「盆花とり」を指標として. 「平成 13 年度国立公園内草原景観維持モデル事業報告書」
 - 18) 浦山佳恵・畑中健一郎 (2016) 長野県の伝統行事における野生生物の利用. 長野県環境保全研究所研究報告, 12, 35-43.
 - 19) 中堀謙二 (1996) 変貌する里山. 安田喜憲・菅原 聰「講座 文明と環境 9 森と文明」朝倉書店, 210-222.
 - 20) 須賀 丈 (2012) 日本列島の半自然草原 ひとが維持した氷期の遺産. 須賀 丈・岡本 透・丑丸敦史「草地と日本人 日本列島草原 1 万年の旅」築地書館, 1-98.
 - 21) 長野県 (2002) 「長野県版レッドリスト (維管束植物編) 2002」
 - 22) 総務省, 国勢調査: <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00200521> (2020 年 2 月 16 日確認)
 - 23) 農林水産省, 農林省統計表 第 1 次～ 53 次 (1926～1978 年 発行): <https://www.library-archive.maff.go.jp> (2019 年 11 月 29 日確認)
 - 24) 農林水産省, 農林水産省統計表 第 54 次～ 92 次 (1979～2018 年 発行): <http://www.library-archive.maff.go.jp> (2019 年 11 月 29 日確認)
 - 25) 長野県編 (1991) 「長野県史 民俗編 第五巻 総説 I 概説」
 - 26) 長野県編 (1991) 「長野県史 民俗編 第五巻 総説 II さまざまな暮らし」
 - 27) 文化庁文化財保護部 (1990) 「民俗資料選集 18 盆行事 I - 岡山県 -」国土地理協会.
 - 28) 文化庁文化財保護部 (1991) 「民俗資料選集 19

- 盆行事Ⅱ－静岡県－」国土地理協会。
- 29) 文化庁文化財保護部（1998）「民俗資料選集 26 盆行事Ⅲ－京都府・大阪府－」国土地理協会。
- 30) 文化庁文化財保護部（2000）「民俗資料選集 28 盆行事Ⅳ－茨城県・埼玉県－」国土地理協会。
- 31) 文化庁文化財保護部（2004）「民俗資料選集 32 盆行事Ⅴ－山形県・新潟県－」国土地理協会。
- 32) 文化庁文化財保護部（2012）「民俗資料選集 43 盆行事Ⅵ－高知県－」国土地理協会。
- 33) 農林水産省，農商務省統計表 第1次～40次（1886～1925年発行）：<https://www.library-archive.maff.go.jp>（2019年11月29日確認）
- 34) 市川健夫（1961）「高冷地の地理学」令文社。
- 35) 長野県農政部「土地改良長期計画 進行管理 年度別整備状況推移表」
- 36) 農林水産省，農林業センサス累年統計－農業編－（明治37年～平成27年）：<https://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/past/stats.html>（2019年11月29日確認）
- 37) 長野県（2001）「特定鳥獣保護管理計画（ニホンジカ）」
- 38) 長野県（2006）「第2期特定鳥獣保護管理計画（ニホンジカ）」
- 39) 長野県，野生鳥獣による農林業被害額の推移：<https://www.pref.nagano.lg.jp/yasei/documents/h15-29-noringyo-higai.pdf>（2019年11月21日確認）
- 40) 喜多村理子（1985）盆に迎える霊についての再検討－先祖を祭る場所を通して－。日本民俗学，157・158。
- 41) 田中宣一（2005）「祀りを乞う神々」吉川弘文館。
- 42) ヨルン・ボクホベン（2005）「葬儀と仏壇－先祖祭祀の民俗学的研究」岩田書院。
- 43) 三郷村誌編纂委員会編（2006）「三郷村誌Ⅱ 第四巻 村落誌編」
- 44) 長野県・三郷村・明盛地区事業委員会（1987）「県営ほ場整備事業明盛地区しゅん工記念誌」
- 45) 伊那市竜東土地改良区編（1973）「土地改良事業竣工記念伊那市竜東土地改良区」
- 46) 立科町誌編纂委員会編（1997）「立科町誌 歴史編（下）」
- 47) 三水村誌編纂委員会編（1980）「三水村誌」
- 48) 長野県土地改良史編集委員会編（1999）「長野県土地改良史 第2巻 土地改良区誌編」
- 49) 長野県・長野県中信平左岸土地改良区（1987）「中信平左岸土地改良事業しゅん工記念誌」
- 50) 中堀謙二（2003）肥料が変えた里山景観。信州大学農学部森林科学研究会編「森林サイエンス」川辺書林，37-58。
- 51) 長野県農村文化協会編（1996）「暮らしが変わる 人が変わる」信濃毎日新聞社，36-40。
- 52) 市川健夫（1996）圃場整備。日本地誌研究所編「地理学辞典」二宮書店，625。
- 53) 山本正三（1996）農業構造改善事業。日本地誌研究所編「地理学辞典」二宮書店，554。
- 54) 山崎不二夫（1996）「水田ものがたり」農山漁村文化協会。
- 55) 丑丸敦史（2012）畦の上の草原 里草地。須賀丈・岡本 透・丑丸敦史「草地と日本人 日本列島草原1万年の旅」築地書館，161-214。
- 56) 長野県（1973）「長野県政史 第3巻」
- 57) 長野県（2016）「長野県第二種特定鳥獣管理計画（第4期ニホンジカ管理）」

Decline of Bon-bana picking and disappearance of habitats of wild flowers in Nagano Prefecture

Yoshie URAYAMA¹, Takeshi SUKA¹, Kenichiro HATANAKA¹, Maychee LIAN^{1,2}

1 Natural Environment Division, Nagano Environmental Conservation
Research Institute, 2054-120 Kitago, Nagano 381-0075, Japan

2 Present address: National Institute for Environmental Studies (NIES), Center for Climate
Change Adaptation, 16-2 Onogawa, Tsukuba, Ibaraki 305-8506, Japan

Key words : Bon festival, *Platycodon granivorous*, grassland, Bon-dana

Abstract

The Bon festival in modern Nagano Prefecture was an opportunity to interact with the spirits of ancestors. People believe that collecting Bon-bana such as a Japanese bellflower (*Platycodon granivorous*) and Yellow Patrina (*Patrinia scabiosifolia*) from fields or mountains at the beginning of Bon festival will bring the spirits of ancestors to them. Bon-bana was believed to possess the spirits of ancestors and played an important role in Bon festival. It was used to decorate Bon-dana (a shelf used in Bon festival) for worship spirits of ancestors and was put into rivers for sending back the spirits of ancestors to another world at the end of Bon festival. However, as habitats decreased, some wildflowers for bon-bana, such as the bellflowers have been threatened with extinction in recent years.

We conducted in-depth interviews in seven regions about Bon festival focusing on the use of Bon-bana in 1955-1965 and its change and reproduced the Bon-dana of 1950s style. We also investigated statistical data of the numbers of cattle and horse, the area of grasslands, the amount of fuelwood production, the area of farmland consolidation, farm households by degree of engagement, and the financial damage to agriculture and forestry by sika deer feeding.

The interview revealed that Bon-bana was no longer to be collected in most of the areas between 1960 and 1975 in Nagano Prefecture because of disappearance of wildflower habitats (i.e., grasslands, well-managed secondary forests, and a ridge between agricultural fields). The area of grasslands reduced because of a decrease in the number of draft animals. Decline of fuelwood production due to the energy revolution since 1955 resulted in an increment of unmanaged secondary forests. Unification of farmland and mechanization of mowing also changed and reduced wildflower habitats. These results infer that the disappearance of the wildflower habitats caused the decline of Bon-bana picking.